慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大河内一男・松尾洋著 日本労働組合物語
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.3 (1967. 3) ,p.346(98)- 347(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19670301-0098
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670301-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

大河内一男・松尾洋著『日本労働組合物語』

題名をみれば明らかなように、本書（明治・大正・昭和）は、明治初年から戦前にかけての日本の労働組合運動の発展についての「物語」的な歴史である。「物語」というと、いかにも通俗的な程度の低い読物であるように感ずる者もあろう。しかし本書はかなり専門的な内容をもち、しかも楽しくよめる労働運動史であり、きわめて克明な日本現代史というべきであろう。わが国における労働組合運動は、明治三〇年代、アメリカ帰りの高野房太郎、城常太郎、沢田半之助等によってはじめられた労働組合期成会とこれを母胎としてつくられた鉄工組合の運動にはじまる。本書は、それ以前の賃労働の形成過程とこれにつづく明治一〇年代の自由民権運動や初期の製糸業労働者の争議についてもふれているが、本格的な叙述は、この三〇年代からはじまる。労働組合期成会はその後、日鉄矯正会や活版工組合などを組織させるのに成功したが、内部的な欠陥と外からの国家権力の圧力によって崩壊させられていく。労働組合運動の衰退後、平民社を中心とする反戦・平和運動および社会主義運動がたかまったのであるが、日露戦争後の内部分裂、その後の硬派と軟派（無政府主義派と議会改革派）の対立と国家権力による徹底的な弾圧、とくに大逆事件という一大陰謀事件によって、明治期の社会主義・労働運動は終りをつげる。

大正期の労働運動は、大正元年、東京大学出身の法学士鈴木文治の友愛会の創立をもってはじまる。大逆事件後の「冬の時代」に、イギリスのフレンドリ・ソサイエティ（Friendly Society＝友愛組合）にならってつくられたものであり、はじめは労資協調的な小規模な労働者の集まりであったが、その後、第一次世界大戦の勃発にともなう物価の昂騰、その結果としての労働者階級の生活の窮乏化とともに、労働者の階級意識のたかまり、戦争による重工業の確立による近代的工業労働者の量的質的増大、大戦末期のロシア革命、米騒動とこれにつづく民本主義運動の発展のなかで、友愛会は、その労資協調的な名称をふりすて、大正一〇年、日本労働総同盟と改称した。日本の労働者階級の運動は、ここにようやく本格的な発展をとげたのである。しかしながらそれと同時に、運動のなかには急進的なアナルコ・サンディカリズムの影響が根強く、従来の労働組合主義とはげしく対立した。その後、関東大震災中、亀戸事件、大杉栄虐殺事件などによってアナーキストの勢力は衰えたのであるが、これに代って、労働運動内部には、日本共産党の指導のもとに左派と総同盟派との矛盾がはげしくなり、大正一四年五月には、総同盟は分裂し、共産党の影響のもとに日本労働組合評議会が生まれた。この時期以後、わが国の資本主義の矛盾の深まりとともに弾圧はいっそうきびしくなり、無産政党運動の分裂とともに組合運動の分裂もまたはげしくなった。昭和時代に入るや、左翼労働組合はますます地下に潜入し、右翼労働組合は形だけのものとなり、満州事変から日華戦争をへて太平洋戦争に至るまでのファシズム化の過程で壊滅させられていったのである。

本書は、以上のように、明治初年から太平洋戦争までの半世紀以上の日本の労働運動の歴史を明治・大正・および昭和の三時期を三巻にわけて、平易に解説的に叙述したものであり、その特色は、異色ある風俗画家織田音也氏の挿画がいたるところにおりこまれていて、読者を楽しませることである。また本書は、その「はしがき」にものべられているように、従来低い評価しか与えられなかった右派の運動についてもかなり評価をしていること、そして何よりもすぐれていることは、豊富な史料を使って、できるだけ事実に即して書いていることである。とくに昭和の巻の末尾の索引と、労働組合組織系統図は便利である。労働組合物語という名前は内容の点からみて些か適当ではないと思うが、とくに不満なことは、内容が太平洋戦争前に限定されており、戦後がないことであろう。だが、それにもかかわらず、労働運動の入門を希望する者、あるいは専門家にも、一読をすすめたい。（筑摩書房・一九六五年刊・四六判・全三冊、一冊四〇〇頁、計一六四〇円）

—飯田　鼎—

＊　＊　＊

大河内一男先生還暦記念論文集第三集『古典経済学の伝統』

本書は大河内教授の還暦を記念するために、主として経済学史研究者の執筆になるところの論文がおさめられている。つぎのような内容から成っている。

I

スミス地代論に関する一考察——国民経済の中に占める農業の地位——（久留島陽三）

スミスの賃金格差論に関する一考察——賃金理論研究（一）——（高島道枝）

II

スチュアート・スミス・リスト（小林昇）、スミスとマルクス——体系構成の発展の視角から——（藤塚知義）

III

「経済人」のユートピア的具象化としてのロビンソン物語（大塚久雄）

スチュアートにおける生活資料価格と賃金（田添京二）

ケネーにおける利潤範疇（横山正彦）

IV

賃金と物価（平瀬巳之吉）

大河内一男先生年譜

大河内一男先生著作目録

あとがき

わたくしは本書をよみ、本書を構成する論文のひとつひとつに感銘をうけ、教えられるところきわめて多かったが、しかしこの短いスペースで、その全部についてくわしい感想や批判を書くことは不可能なので、それぞれの論文の主要な論点はどこにあるかという点にとどめることとする。

冒頭の久留島氏の論文は、スミスの地代論を、国民経済における農業の地位という視点から把握され、国富論の叙述をかなり詳細に紹介しながら、スミスの地代論の意義は、経済学体系の枢軸たる価値論・価格論との連繋において正しく位置づけたこと。第二に、近代的資本制的土地所有の性質について洞察を示していることをあげておられるが、差額地代概念を重視するリカードウとの対比が全く無視されているのは何故であろうか。

第二に高島氏の論文は、賃金理論が解くべき課題は、第一に、賃金の絶対的大きさ、賃金水準の高さを理論的に明らかにすること、第二に、賃金格差の発生の理由とその大きさを説明することであるとして、とくにこの第二の問題の理論的研究が第一のそれに比べてはるかに遅れているという現状認識から、その問題に理論的にもっとも関連の深いスミスおよびミルの学説を批判検討したものである。著者は、スミスの賃金格差論が、その成